大宰府アカデミー・令和編　第５講　　２０２３年８月１６日
於・日本経済大学福岡キャンパスＫＯＲＯＫＡＮ４階大講義室

大宰府機構の成立とその変遷

佐藤　信（東京大学名誉教授、くまもと文学・歴史館長、横浜市歴史博物館長）

はじめに

律令国家にとって、西海道に置かれた大宰府は、中国・朝鮮半島、隼人・南方世界との外交・軍事・交流や、西海道広域統治の拠点として、きわめて重要な役割を担った。

大宰府は、平城宮・多賀城と合わせて、古代「三大史跡」とも言われる。大宰府史跡は二〇二一年に史跡指定一〇〇年を迎え、多賀城も宮城県立多賀城跡調査研究所の設立五〇年を迎えている。平城宮・大宰府・多賀城では、ここ半世紀の発掘調査成果によって多くの重要発見を得て、古代史にあたらしい知見を提供してきた。

最近の日本古代史の研究動向は、①東アジア（東ユーラシア）的視野から日本列島の古代史をみるようになったこと、②発掘調査成果や木簡など出土文字資料によって、歴史像を具体的・立体的に再構成できるようになったこと、③これらにより諸地域の古代史像が明らかになって、列島の古代史の多元的展開が判明してきたこと、また、④様々なレベルの境界を越えた地域間交流の盛んな展開が解明されたこと、と整理できる。かつて、古代史は律令国家の編纂による六国史・律令などの文献史料のみから、国家・天皇・畿内・中央中心に描きがちであったが、今日では発掘調査成果や出土文字資料により、社会・下級官人・民衆・地方といった列島各地域の古代史像もあわせて描かれるようになった。

律令国家の中央集権性を解こうとする時、平城宮・大宰府・多賀城などを複眼的に検討することは、大変有益である。中央からのまなざしと地方からのまなざしを総合して列島全体の古代史像をみるとき、とくに大宰府のような地方に置かれた大規模官衙の実像や木簡など出土文字資料が語る歴史情報は大いに注目される。大宰府木簡は重要文化財となっており、古代史を理解する貴重な資料と評価されている。こうした視点から、大宰府機構の成立とその変遷を検討してみたい。

１．大宰府－天下の一都会－

１．１　大宰府

筑紫国に海路赴任する途上の柿本朝臣人麻呂は、「大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ」（『万葉集』巻三、三〇四）と詠んでおり、大宰府は「遠の朝廷」とも称されていた。大宰府の官人たちは、『続日本紀』神護景雲三年（七六九）十月甲辰条に「大宰府言さく、『この府は人・物殷繁にして天下の一都会なり。…』」と称しており、宮都の平城京に準じる人口と流通をもつ都市像を自負している。大宰府の発掘調査の進展により、かつて鏡山猛氏が「大宰府都城」と呼んだ条坊制的な構造をもつ大宰府府郭の都市像が、明らかになってきている。大宰府史跡では、福岡県立九州歴史資料館による多年の発掘調査・研究によって、大宰府の実像解明が進んできたし、太宰府市教育委員会による条坊遺跡その他の調査・研究成果も合わせて、古代都市としての大宰府像が見えてきた。

１．２　大宰府史跡の調査成果

大宰府は地方に置かれた古代最大の官衙であり、政庁正殿の都府楼を中心として、様々

な機能を果たす多様な施設から構成されていた。大宰府を構成する蔵司などの諸官司（曹司）・学校院や、「府の大寺」といわれた観世音寺など、そして防衛のための水城や大野城・基肄城・阿志岐山城等の古代朝鮮式山城群など、その広がりは多種・広範囲に及ぶ。

大宰府をとりまく史跡群としては、

大宰府跡・大宰府学校院跡・観世音寺境内及び子院跡・筑前国分寺跡・国分瓦窯跡・塔原塔跡、大野城跡・水城跡・基肄城跡・阿志岐山城跡・宝満山・牛頸須恵器窯跡・鴻臚館跡・怡土城跡

などがあり、付随する官司や生産遺跡として、次のような施設も知られる。

不庁地区（官衙群跡）・来木地区（官営工房群）・月山東地区（官衙跡）、筑前国府跡（国分松本遺跡）、筑前国分尼寺跡、大宰府条坊跡（「朱雀大路」など）、主船司・主厨司・警固所

大宰府を取り囲んでネットワークを組む広域の史跡・遺跡群としては、

古代朝鮮式山城跡・神籠石系山城跡・烽（とぶひ）・地方官衙遺跡（国府・郡家）・瓦窯跡（老司瓦窯跡など）・土器窯跡（牛頸須恵器窯跡など）・宮ノ本遺跡（買地券出土火葬墓）・前畑遺跡（土塁「羅城」カ）

などがあり、寺院・神社では、

観世音寺・戒壇院・筑前国分寺・筑前国分尼寺・般若寺跡・塔原塔跡・竈門山寺
太宰府天満宮（安楽寺）・宝満山・天拝山

などが知られる。また、大宰府をめぐる交通路関係遺跡として、山陽道跡・西海道跡・古代官道跡（水城東門・西門から博多湾に向かう二本の直線官道、西海道など）、駅家跡、なども指摘できる。これら大宰府関係の遺跡群を、総体として大宰府史跡群ととらえる視角が必要であろう。

大宰府史跡の発掘調査・研究は、これまで福岡県立九州歴史資料館が主に担い、九州における発掘調査を牽引してきた。関連する条坊遺跡・水城・大野城や鴻臚館などは、太宰府市・大野城市・筑紫野市・春日市・宇美町・福岡市などの市町が調査を担い、連携・協力しながら総体として大宰府史跡群の発掘調査・研究が進められ、さらに史跡整備・活用・展示・発信も展開してきた。

大宰府史跡については、調査研究機関や教育委員会による地道な発掘調査の積み重ねの上に、多くの重要な調査・研究成果が蓄積されてきた。古代大宰府機構の構造や機能、そして藤原純友の乱による焼失と再建など長期にわたるその変遷が解明され、日本史の理解に大きな影響をもたらした。文書行政や貢進制・財政の実情を示す大宰府木簡が多く出土したことも注目され、太宰府市教育委員会の発掘調査による大宰府条坊遺跡・「客館」の確認も、古代都市大宰府と国際交流との結びつきを示す大きな成果であった。

２．大宰府機構とその機能

２．１大宰府機構

日本古代の地方官衙としては、大宰府、国府（国衙）、郡家（郡衙）のほか郡家出先機関・城柵・関・駅家などが挙げられるが、その最大のものが大宰府である。対外外交を管轄し、西海道の九国三島を統括するという国府をしのぐ組織であり、官人の規模も国府をはるかにしのぐ。長官の大宰帥の官位相当は親王四品・従三位であり、大国の守の従五位

上相当をはるかにしのぐ上級貴族が任じられた。大宰帥の職掌には、国司とは違って「蕃客・帰化・饗讌」が規定されており、中国・朝鮮や隼人・南島に対する対外通交の前線を担うところが、大きな特質といえる。

外交や西海道統括という中央政府に準じた行政を担うことから、大規模な官人構成をもち、管下の官衙（曹司、実務官衙）にも多様な部署をかかえている。

古代都市としての大宰府については、平城京の条坊制にならって条坊をもつ府郭を備えていたことが、他の国府などとは異なっている。大宰府の条坊遺跡は、太宰府市教育委員会による地道な発掘調査によって次第に明らかになってきた。かつて鏡山猛氏が想定した都城型の条坊説そのままではないが、「朱雀大路」は確かに存在して、独自の条坊の展開が明らかになっている。

都府楼の政庁前面に広がる官庁街としての不庁地区の展開、朱雀大路や条坊道路の存在、街区の区画にあわせて長大な南北棟建物が規格性をもって配置される推定「客館」のような町並みのあり方は、大宰府の府郭が宮都にならった条坊をもち、「天下の一都会」と称される都市としての実態をもったことを示している。

律令の職員令の規定での大宰府官人は以下のような員数・職掌であり、大宰府の各機構に配置されていた。竹内理三「大宰府政所考」（『竹内理三著作集　第四巻律令制と貴族』所収）を参照。

主神一人…掌諸祭祀事
帥一人…掌祠社戸口籍帳、字養百姓、勧課農桑、糺察所部、貢挙、孝義、田宅、良賤、訴訟、租調、倉稟、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵駅、伝馬、烽候、城牧、過所、公私馬牛、蘭遺雑物、及寺、僧尼名籍、蕃客、帰化、饗讌事
大弐一人…掌同帥
少弐二人…掌同大弐
大監二人…掌糺判府内、審署文案、勾稽失、察非違
少監二人…掌同大監
大典二人…掌受事上抄、勘署文案、検出稽失、読申公文
少典二人…掌同大典
大判事一人…掌案覆犯状、断定刑名、判諸争訟
少判事一人…掌同大判事
大令史一人…掌抄写判文
少令史一人…掌同大令史
大工一人…掌城隍、戎器、舟楫、諸営作事
少工二人…掌同大工
博士一人…掌教授経業、課試学生
陰陽師一人…掌占筮相地
医師二人…掌診候、療病
算師一人…掌勘計物数
防人正一人…掌防人名帳、戎具、教閲、及食料田事
佑一人…掌同正
令史一人

主船一人…掌修理舟楫
主厨一人…掌醯、醢、鮓、葅、醬、豉、鮭等事
史生廿人

令制では、さらに府官に給わる事力を以下のように規定している。

帥二〇人、大弐一四人、少弐一〇、大監・少監・大判事に各六人、大工・少判事・大典・防人正・主神・博士に各五人、少典・陰陽師・医師・少工・算師・主船・主厨・防人佑に各四人、諸令史に各三人、史生に各二人

また『延喜式』民部下には、大宰府に充てる仕丁の配分を次のように記す。

帥三〇人、大弐二〇人、少弐一二人、大少監各八人、主神・主工・大少典・博士・明法博士・主厨各六人、音博士・陰陽師・医師・算師・主船各五人、大唐通詞四人、史生・新羅訳語・弩師・傔仗各三人、府衛四人、学校二人、蔵司二人、税倉二人、薬司二人、匠司一人、修理器仗所一人、守客館一人、守辰六人、守駅館一人、儲料二〇人また主船一百九十七人、厨戸三百九十六烟とある。

こうして、大宰府の諸機構は、中央政府に準じる規模をもって配置されていた。

２．２　大宰府の機能

大宰府が果たした機能は、外交・儀礼・行政・財政・軍事・宗教・給食・生産・交通などの諸分野にわたる多様なものであった。外交機能をもち西海道の統治拠点でもあり、大宰府管内諸国の国府の上に位置づけられることも、多様な機能と結びついている。

外交機能は、東アジアの隣国・蕃国や隼人・南島に対する外交を担うもので、新羅使・渤海使や南島などからの使節等の来朝に対応している。日本からの外交使節も、遣唐使だけでなく、『万葉集』に和歌群を残す遣新羅使など、大宰府を経由して海を渡って行った。こうした外交使節を迎える迎賓館として、博多湾岸には鴻臚館（筑紫館）（福岡市）が営まれ、大宰府との間は水城の西門につながる直線官道で結ばれていた。さらに大宰府下にも、海外使節を応接した客館が推定されている。

行政機能は、外交とともに九国三島の西海道諸国に対する統治・行政を総括する政務・儀式・饗宴などの儀礼と、文書行政を特徴とする律令制地方行政システムにおける役割である。文書行政としては、管内諸国から中央の太政官に送る文書は大宰府で取りまとめて「大宰府印」を捺した大宰府解とともに中央に進達された、中央の命令を伝える太政官符も、大宰府経由で管内諸国に伝達された。こうした文書行政にみられる大宰府と管内諸国府との地方行政上の関係を背景に、大宰府下には諸国の出張所的な機関が置かれたと思われる。これは、平城京に内国の諸国が「調邸」と呼ばれる出張所をもったことが参照される。そして、大宰帥大伴旅人の官舎（帥館）で開かれた天平二年（七三〇）の梅花の宴（『万葉集』巻五、八一五～八四六番）には、大宰府の府官とともに筑前の守・介・掾・目のほか、筑後守・豊後守・薩摩目・大隅目、壱岐守・目、対馬目たちが参加していることが参照される。

財政機能としては、西海道諸国（筑前・筑後、肥前・肥後、豊前・豊後）の調庸物は、長門国以東の一般諸国（陸奥・出羽を除く）のように平城京に貢進するのではなく、大宰府に集約された。蔵司は、こうした大量の調庸物を収納する倉庫群の官司であった。管内諸国からの綿や紫草などの調庸物や交易物、そして南島からの貢上物など多彩な品物が大宰府に集積された。西海道特産の調綿や紫草などは、大宰府から平城宮に充ててまとめて貢

進され、その際大宰府において荷札（広葉樹を材とする）を付けて宮都に送られた。その木簡が平城宮跡から出土している。こうした管内諸国から大宰府への諸物資運送のためにも、諸国の出先機関が大宰府下に置かれたと思われる。

また、諸国で口分田を班給した剰余の「公田」（乗田）では、耕地を農民に賃租して収穫の五分の一を地子として納めさせる地子経営が行われた。その公田地子は、内国では太政官に送納されて太政官の財源となったが、西海道では大宰府に送納され府の財源となった。八世紀半ばからは、「府官公廨」として大宰府官人たちの得分となった。この府官公廨も、大量に大宰府に収納された。

軍事機能は、対外防衛そして対隼人・南島の性格をもって、大宰府を守る形で多様な造営が行われた。防人・烽火｛とぶひ｝・水城・古代朝鮮式山城群・怡土城などがそのために営まれた。防人は大宰府の防人司に属して北部九州などの対外防衛に当たる兵力であり、東国の兵士が動員された。西海道諸国（筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後）の軍団の兵力も、直接には諸国国司の管理下にあるが、諸国司の上に大宰府が位置していた。

防人・烽火や水城は、六六三年の白村江の敗戦の翌年に緊急に作られ、さらに翌年に長門城・大野城・基肄城などの古代朝鮮式山城群が作られたことが、『日本書紀』にみえる。

○『日本書紀』天智三年（六六四）是歳条

対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防（さきもり）と烽（とぶひ）とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

○『日本書紀』天智四年（六六五）八月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

水城では、土塁を版築する際の敷粗朶工法や柱の埋め殺し工法などに半島の技術がうかがえ、暗渠導水管の精密な工法にも高レベルの技術がみられる。『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条には「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ」とあり、築城から三〇年余を経た大野城・基肄（椽）城そして肥後国菊池郡の菊池川水系を押さえる鞠智城の三つの山城の修繕が、大宰府の管轄下で行われている。七世紀後期に九州から瀬戸内・畿内にかけて営まれた山城群の多くが八世紀前葉で機能を終え停止されたのに対して、この時「繕治」された三城だけが、引き続いて十世紀代まで機能し維持させたことは、この三山城が国家的に格別に位置づけられたことを示そう。

宗教機能としては、大宰府の「府の大寺」とされ、西海道を代表する寺院の観世音寺が存在した。大規模な寺容は、僧坊や講堂の規模にもうかがえるが、延喜五年（九〇五）の「観世音寺資財帳」（国宝）にみることができる。観世音寺に置かれた戒壇は、西海道において正式な僧侶となるための受戒の儀式を行う場とされた。天平宝字五年（七六一）に、内国の東大寺、東国の下野薬師寺と並んで西海道の観世音寺が正式な戒壇と認められ、のちに「本朝三戒壇」と呼ばれた。神祇祭祀については、大宰府の官僚組織として神祇を担う「主神」（かんづかさ）が存在した。また、豊前の宇佐八幡宮や、府下の太宰府天満宮・安楽寺が菅原道真の墓所・祭祀の場として大きな機能を果たした。

給食機能は、官人に対する毎日の給食や食材の管理など、厨の機能である。大宰府官には「主厨」（職員令）があり、官司として主厨司があった。

生産機能では、大宰府の造営・維持に必要な官営工房が必要であり、製鉄、瓦や土器を

焼く窯、漆その他の工房の生産遺跡が近辺に存在した。
交通機能は、西海道・山陽道などの官道（駅路・伝路）や駅家の体系が大宰府中心に配置された。

３．大宰府機構の成立

五二七年・五二八年（継体二一・二二）の磐井の戦いののち、磐井の子の葛子は死罪を免れるため博多湾沿いの糟屋屯倉をヤマト王権に献上した。これは対外交流の権限の献上でもあった。これを引き継ぐ那津官家（屯倉）は、博多湾に置かれたヤマト王権の直轄領であり、のちの律令制下の大宰府の前身として位置づけられる。博多湾に面した対外交流や政治的・軍事的な拠点で、大量の稲穀を貯積する国家的な大規模倉庫群でもあった。『日本書紀』宣化元年（五三六）条に「修造官家、那津之口」とあり、来朝する海外使節接待のために筑紫の地に那津官家を設け、茨田屯倉・尾張の屯倉・新家屯倉・伊賀の屯倉などから稲穀を運び込ませている。福岡市博多区の比恵遺跡群で、六～七世紀の三本柵列に囲まれた大規模な掘立柱総柱倉庫建物群がみつかって、那津官家の遺跡と考えられている。
六六三年の白村江戦の際には、倭の大軍を半島に送って百済復興軍を支援し、唐・新羅連合軍と対戦することになった。斉明天皇ははじめ博多湾岸の長津宮に行宮を構え（のちに筑後川沿いの朝倉宮に遷る）、また中大兄皇子も「水表の政」の指導にあたった。結局白村江で大敗北してしまうが、出兵にあたって那津官家の機能は、軍事的・財政的（食料供給）な拠点として活用されたと思われる。敗戦後に、国家存亡の危機という国際的緊張のもと、防人・烽や水城・古代朝鮮式山城を築いて対外防衛にあたっており、国家的な規模で北部九州の防衛を構成している。その際、大規模な防人の軍事力の組織化や、古代山城には大量の稲穀の貯積が為されている。
『日本書紀』崇峻紀に「筑紫将軍」、推古紀に「筑紫大宰」とみえ、筑紫大宰は広域行政や外交をになったと考えられている。天智天皇・天武天皇時代には「筑紫率」「筑紫総領」があり、天智六年（六六七年）に「筑紫都督府」、天智十年（六七一年）に「筑紫大宰府」の組織名がみられる。
のち大陸・半島と直接向かい合う筑紫には、ヤマト王権が派遣する筑紫大宰が広域行政を担った。六七二年の壬申の乱では、美濃の不破関の地を大海人皇子（天武天皇）側に押さえられ東国の軍勢動員に失敗した大友皇子の近江朝廷は、西国の吉備大宰と筑紫太宰のもとに軍勢動員の使者を派遣した。この時筑紫大宰であった栗隈王は、大友皇子の使者に対して「筑紫大宰の軍勢は対外防衛のための軍事力であり、国内の内戦に移動したら外敵の襲来に備えられない」として要請を断っている。
律令制下の大宰府機構は、大宝令によって制度的に整えられたと思われる。

４．大宰府機構の変遷

大宝三年（七〇三）に大宰府史生を十員増加したり、和銅元年（七〇八）に帥に八人、大弐に四人の傔仗を給うなどの官員の充実が図られている。
天平十二年（七四〇）の大宰少弐藤原広嗣の乱の結果、大宰府は数年間停廃された。行政的には筑前国司が、軍事的には七四三年に鎮西府が置かれて、将軍・副将軍・判官・主典天平十七年（七四五）にはふたたび大宰府にもどることとなった。

大宰府機構の諸司や諸所については、諸史料によって、政所、神司、防人司、主船司、主厨司、大野城司、博多警固所、学校院、蔵司、薬司、匠司、修理器仗所、客館、鴻臚館（筑紫館）（蕃客所）、駅館、貢上染物所、作物所、兵馬所、税司、大帳所、公文所、作紙所、貢物所などが指摘されよう（竹内理三説参照）。

のち、菅原道真が九〇一年に大宰府員外帥に左遷されたように、大宰府への任官が中央政界からの左遷の対象化していった。

万寿三年（一〇二六）の大宰府解（『類聚符宣抄』三）では、大宰府官人の署名ポストとして

帥一人、大弐一人、少弐二人、大監二人。権大監二人、少監四人、権少監一人、大典三人、権大典二人、権少典一人

の一九ポスト（令制は一二ポスト）になる。さらに、康平二年（一〇五九）大宰府政所下文の署名ポストでは、

大監九人。権大監五人、少監四人、権少監五人、監代六人、他四人、典代三人

の計三六ポストに増加している。貴族の階層的分化が進むこととあわせて、府官や受領国司たちの前任者のなかに、任国に土着して勢力を張る者が増えていき、また在地有力者も次第に在庁官人化していった。

５．遺跡群としての大宰府

発掘調査で明らかになった大宰府の諸施設について、上記した大宰府の諸司・諸所との関係からも、概観しておきたい。

大宰府政庁…「都府楼」とも称される。巨大な礎石が基壇上に現存する正殿を中心とするが、南から南門・中門・正殿・後殿・北門が南北に並び、中門と正殿を結ぶ回廊や南北の南門・北門が発する築地によって南北三つの区画に分けられている。中央の区画の正面に東西棟の正殿があり、その前面広場の東西にそれぞれ二棟の南北棟の脇殿が配置されている。下層の七世紀後期の掘立柱建物群（建物配置は未詳）からなる第Ⅰ期、八世紀になって上記のような配置で礎石建物群が立ち並んだ第Ⅱ期、天慶四年（九四一）に藤原純友の乱で焼失して焼土層がある上に同配置で再建され、現在見られる正殿の礎石・基壇の時期にあたる第Ⅲ期と時期区分される。後殿の近くからは削屑をふくむ大宰府木簡が大量に出土しており、後殿が文書行政の場となったことが推定された。

不庁地区…都府楼前面の東西道路の南に、官衙（曹司）群の区画が並んで展開した地区が、発掘調査で確認されている。政庁前面に大宰府を構成する諸官司（曹司）の官庁街があったのである。この地区からも、木簡が多く出土しており、とくに基肄城の穀の分配について記した文書木簡は注目される。この木簡は、基肄城の倉庫群に貯積された大量の籾穀が大宰府の管理下にあり、何らかの理由で筑前・筑後・肥前・肥後などの諸国にその稲穀を班給する際に、大宰府官人の大監が派遣されたことを示している。

〇大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随　大監正六上田中朝[

大野城・基肄城・鞠智城の三つの山城は、『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条に国家的に「繕治」された記事があり、他の七世紀代の古代山城が八世紀前葉で機能を失うのに対して、この三城のみは十世紀頃まで機能を継続している。上記の木簡も、基肄城

に貯積された穀が大宰府の管理下にあったことを示している。

大宰府木簡としては、西海道管内諸国からの紫草・綿など調庸物の貢進物荷札木簡が出土している。大宰府が、管内諸国からの調庸を集約したことを示す実物史料である。また、南島木簡も出土している。「㮈美島」・「伊藍島」（沖永良部島）と記載した木簡であり、南島との交流を示す。なお、平城宮跡からは、大宰府に集まった諸国からの調綿の一部を大宰府から平城宮宛てに荷造りして貢進した際に、大宰府で付けた貢綿荷札木簡が多く出土している。大宰府で書かれたこの貢綿荷札木簡群は、材に広葉樹を利用していることが特徴であり、もっぱら檜・杉の針葉樹を材とした日本古代木簡の中にあって大きな特徴を示している。

蔵司地区…政庁地区の西に小河川をへだてて台地状の高まりを利用して、蔵司地区がある。近世に多数の礎石の配置を記録した図面が知られるが、発掘調査によって、規格をもって整然と並ぶ大規模な倉庫群がみつかった。倉庫群の台地西側には、円形柱座をもつ礎石を配置した大規模な建物があり、儀礼的な施設の可能性がある。

月山地区…政庁の東側の丘陵部にあたる月山地区は、史料から確認できる水時計（漏刻）が設置された場所と推測されている。

学校院…月山地区の東方に並ぶ地を占めて、学校院が存在した。西海道の諸国の国学の上に位置する教育施設である。官人の再生産をめざして府官などの子弟を教育した。孔子廟があり、釈奠（孔子祭り）の儀礼が行われた。吉備真備が大宰府に赴任した時代に釈奠の儀礼が整えられたという。朝鮮半島と類似する文様塼が出土することが名高いが、本格的な発掘調査はまだである。

観世音寺…西海道諸国の仏教を統括し、諸国国分寺の上に立つ大宰府の大寺であった。内国の東大寺、東国の下野薬師寺の戒壇と並んで西海道の観世音寺の戒壇は、天平宝字五年（七六一）に「本朝三戒壇」とされた。僧坊の規模の大きさも合わせて、延喜五年（九〇五）の「観世音寺資財帳」には、観世音寺の寺勢の大きさが示されている。七世紀の梵鐘も伝えられるが、発掘調査成果を受けても、創建期をめぐってはなお課題が残っている。

鴻臚館跡（筑紫館跡）…新羅などの外国使節や日本から派遣される遣唐使・遣新羅使たちを迎える迎賓館が博多湾沿いに営まれていた。東に開いた門は、水城の西門につながる直線官道とむすびついていたと考えられる。のちに鴻臚館交易ともいわれる外国使節・外国商人たちとの交易の場ともなった。南館・北館の二つの客館からなり、掘立柱建物群から礎石建物群に変遷したことが発掘調査により明らかになっている。九世紀代の、優秀なイスラム陶器・ガラス器・中国陶磁器などが出土している。

この鴻臚館跡からの出土木簡には、豊前国京都郡や南海道の讃岐国三木郡からの庸米等の貢進物荷札木簡があり、大宰府や平城京に送られるべき貢進物が、大宰府のもとで国家的な施設であった鴻臚館に転送されたことが知られる。

鴻臚館跡出土木簡

○・京都郡庸米六斗　　（豊前国）

　・□□［　］□　［　］月　　一八六㎜×二一㎜×八㎜

○賛伎国三木郡□□六斗　　二一三×（二一）×四　　○三一型式

大宰府のその後の歴史をめぐっては、西海道ならではの全国的な争乱や対外関係の事件が起きている。七四〇年には藤原広嗣の乱があり、大宰少弐藤原広嗣が烽火をあげて管内

諸国から軍事動員して反乱を起こしている。乱の制圧後、大宰府は一時停止された。また藤原純友の乱によって、九四一年に純友の軍勢に襲われた大宰府は焼失した。焼けた痕跡として大宰府の発掘調査では焼土層がみとめられ、その上層か下層かで時代の判定ができている。また対外関係の事件として、一〇一九年の刀伊の襲来もあり、これは大宰府や武人たちの活躍により対応できたなどの事件が知られる。

おわりに

あたらしい古代史の動向の一つは東アジアの国際関係から列島の歴史を見直す所にあるが、「文明のクロスロード」として東アジア交流史の中で大宰府が果たした機能を明らかにすることは、その点大きな意義がある。また、遺跡群としての大宰府史跡のあり方や古代都市としての大宰府の実像の解明は、他の地方官衙・城・寺院・生産遺跡・交通路などの解明とリンクして、律令国家における中央と地方との関係をとらえ直す道を開くことになろう。

大宰府史跡群の調査・研究がここまで展開した基盤は、継続されてきた毎日の地道な発掘調査の成果に多く負っていることは、誰もが認めるところであろう。地味な発掘調査が積み重なって、大宰府史跡群の各地区の歴史的意義が明らかになってきた様子は、最近の大部な報告書群によって知られる。また、これと同じことが、多賀城跡の発掘調査・研究成果についても、いえるのである。

今日では、発掘調査に対してマスコミをにぎわせる「教科書を書き換える新発見！」に注目が集まり過ぎる傾向を感じるが、地味ながら、律令国家の構造理解や古代都市の実像解明に結実して大きな成果に結びつく継続的な発掘調査を、大切にしていただきたい。大宰府史跡群の調査・研究では、ぜひ、今後の戦略的な発掘調査の成果を期待するとともに、史跡の整備・活用と調査・研究成果のさらに広範な公表を通して、国民・市民への発信を進めていただきたい。

参考文献

石松好雄・桑原滋郎『大宰府と多賀城』（古代日本を発掘する４）岩波書店、一九八五年
鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房、一九六八年。『大宰府遺跡』ニュー・サイエンス社、一九七九年
九州歴史資料館『大宰府－その栄華と軌跡－』二〇一〇年。『特別史跡水城跡』大宰府史跡ハンドブック、二〇一四年。『特別史跡大野城跡』大宰府史跡ハンドブック、二〇一五年。『大宰府への道－古代都市と交通－』二〇一八年。『特別史跡大宰府跡』大宰府史跡ハンドブック、二〇一八年
倉住靖彦『大宰府』教育社、一九七九年。『古代の大宰府』吉川弘文館、一九八五年
佐藤信編『日本の時代史４　律令国家と天平文化』吉川弘文館、二〇〇二年。佐藤信編『古代史講義　宮都篇』筑摩書房、二〇二〇年。
佐藤信『列島の古代』日本古代の歴史６、吉川弘文館、二〇一九年
大宰府史跡発掘五〇周年記念論文集刊行会『大宰府の研究』高志書院、二〇一八年
藤井功・亀井明徳『西都大宰府』日本放送出版協会、一九七七年
渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』講談社版日本の歴史０４、講談社、二〇〇一年

メモ